

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2762 号 2015.12.11 発行



知的障害者らの絵画 25 点、東京・渋谷で展示

毎日新聞 2015 年 12 月 9 日

アーティストの松本倫子さんが描いたネコの絵

知的障害者らの絵画展「Art of the Rough Diamonds (ダイヤの原石たち)」が 12～18 日、東京都渋谷区のセルリアンタワー東急ホテル 1 階の「GALERIE AZUR」である。障害のあるアーティストら 6 人が描いた動物や人物など約 25 点が展示、販売される。各日午前 11 時～午後 6 時。入場無料。問い合わせは同ギャラリー (03・6427・0029)。

人気の縁起物、申の土鈴作りピーク 県心身障害者コロニー

秋田魁新報 2015 年 12 月 9 日

真剣な表情で土鈴作りに励むコロニーの利用者たち

秋田県由利本荘市西目町の県心身障害者コロニーの工房で、来年のえとの「申(さる)」をかたどった土鈴作りが盛んに行われている。

素朴な仕上がりで愛らしさが特徴で、縁起物として人気を集めている。作業は 28 日ごろまで続く。

8 日は、利用者 6 人が粘土で成形した本体の表面を紙やすりで削って仕上げ、素焼き後の本体の下塗り作業などを実施した。絵付けは職員が担当している。

1 個 500 円ほどで、西目町にある同コロニーのアンテナショップ「歩人(ほっと)」や、道の駅にしめ、秋田市のアトリオンなどで計千個が販売される。

問い合わせは県心身障害者コロニー TEL 0184・33・2255



障害者の人権を守る社会を 大阪で集会

朝日新聞 2015 年 12 月 9 日

障害者の権利が守られる社会づくりを訴える人たち=9 日、大阪市中央区

障害者の人権が守られる温かい社会を――。障害がある人や福祉の現場で働く人ら約 400 人が 9 日、大阪市中央区で「ヒューマンウェーブ集会」を開いた。1991 年から始まり、今年で 25 回目。大阪府庁の周辺を練り歩き、日本が 2014 年に批准した「障害者権利条約」に沿った社会づくりを訴えた。



9 日は 3 日から始まった「障害者週間」の最終日。今年は集団的自衛権の行使を認める

安全保障関連法が成立したことを踏まえ、集会のスローガンに「戦争と障害者のしあわせは絶対に両立しない！」というメッセージを加えた。福祉より国家への貢献が優先された戦時下へ二度と戻ってはならない、との思いが込められている。

集会では、発達障害がある松浦文香さん（26）＝大阪府八尾市＝がマイクを握り、「障害者への偏見や差別は完全にはなくなっています。すべての人が社会に参加しやすい世の中にしてほしい」と語った。（花房吾早子）

障害者も住みよい街に 市長と語る会 トイレ、駐車場などで不便実感



佐賀新聞 2015年12月09日

笑顔を交え、日ごろ不自由を感じる点を話し合う参加者たち＝佐賀市兵庫北のほほえみ館

だれもが暮らしやすい街づくりを目指す障害者による意見交換会が6日、佐賀市のほほえみ館であった。「佐賀市長と障害者の語る会」を来年1月に控え、要望点や意見をまとめるために開いた。障害者30人が参加し、それぞれの視点から日ごろ不便に感じる点について意見を出し合った。

脳性まひや視覚障害のある佐賀市近郊の障害者が集まった。「トイレ」「駐車場」など項目を分け、5～6人ずつ4グループに分かれて不便な点を付箋に記入し、模造紙に貼っていった。まとめのグループ発表では、車いすで乗降する際、他の車や壁があるためにドアが開けないことがあるため「駐車場とは別に車を乗り降りするスペースがほしい」「車いすでは自動販売機の最上段に届かない」などの意見が出た。

会を企画した「〇〇な障害者の会」の内田勝也さん（26）＝佐賀市＝は「障害が異なれば、不便を感じるポイントも違い、意見を聞いて刺激になった。問題点を一つずつ社会に伝えていくことが重要だと思う」と話した。

「佐賀市長と障害者の語る会」は初の企画で、「障害のある人の話を聞きたい」と市側からの要請を受け、1月24日に開く。メンバーはこの日出た意見を整理し、秀島敏行市長に改善点を伝える。

母親のホルモン異常、子どもの自閉症に関連スウェーデン研究



時事通信 2015年12月9日

【ストックホルムAFP＝時事】ホルモンバランスの乱れを抱えている母親から生まれた子どもは、自閉症を発症するリスクははるかに高いとする最新の研究結果が8日、スウェーデン・カロリンスカ研究所から発表された。（写真はウクライナのキエフで開催された自閉症児のイベントに参加する子ども）

英科学誌ネイチャー系オンライン医学誌「モレキュラー・サイキアトリー」に掲載された成果は、多のう胞性卵巣症群（PCOS）と呼ばれるホルモンバランス異常と、子どもの自閉症スペクトラム障害

（ASD）との関連を示すものだ。

ASDとは、子どもにみられるさまざまな神経発達障害のことだ。

カロリンスカ研究所の公衆衛生研究部門を率いる研究者、キリアキ・コシドー氏は「母親がPCOSと診断されると、子どものASDリスクが59%増加することを発見した」

と述べた。

原因については完全には明らかになっていないが、過剰量のアンドロゲン（男性ホルモン）を生成するPCOSを抱える母親に由来する特定の性ホルモンに、生後間もない時期にさらされることが、子どもの自閉症発症の一因となる可能性があることを示唆する証拠がある。

コシドー氏は、声明の中で「PCOSと肥満症の両方を抱える母親のグループでは、ASDリスクがさらに増加した」と指摘している。

妊娠可能年齢の女性の5～15%が、PCOSに罹患（りかん）している。

研究チームは、1984年～2007年の期間にスウェーデンで生まれた全ての子どもを対象とする、人口ベースの全国調査を実施、ASD患者約2万4000人を特定した。

ASDは女兒より男児に4倍多くみられるが、今回の研究では、女兒と男児でリスクに差はみられなかった。

今回の疫学的研究では、母親のPCOSと子どものASDとの関連性を説明するメカニズムに関する調査は十分に行われていない。

研究チームによると、今回の成果を完全に説明するにはさらに研究を重ねる必要があるという。

研究を主導したレニー・ガードナー氏は「PCOSを抱える妊婦へのケアについて、臨床医師らに具体的な提言を行うのは時期尚早だ」と話している。【翻訳編集AFPBBNews】

【教育動向】大学での障害者支援は？ 国大協がモデル案 斎藤剛史

産経新聞 2015年12月10日

2016（平成28）年4月から障害者差別解消法が施行されることを受けて、国立大学の集まりである国立大学協会は、大学がどのような対応をすべきかを示した教職員対応マニュアルのモデル案を作成しました。障害のある学生などが、どんな支援を大学側から受けられるのかを例示しているのが大きな特徴です。

障害者差別解消法は、国公立学校について障害者に対する「合理的配慮」の提供を義務付けています（私立学校は努力義務）。どのような対応が「合理的配慮」として受けられるのかについては、当コーナーでも文部科学省の「対応指針」、日本学生支援機構の「支援・配慮事例」などを紹介してきましたが、具体的事例がわかりづらい面もありました。

国大協の「教職員対応要領（雛形＜ひながた＞）」は、各国立大学が障害のある学生などに対するマニュアルを策定する際のモデルとして作成されたもので、障害者にどのような支援や配慮をするべきかを網羅的に示した豊富な具体例を「留意事項」として盛り込んでおり、大学進学を希望する障害者やその保護者などにとっても参考になるものとなっています。

まずモデル案は、障害があることを理由にして、受験、入学、授業の受講、学生寮への入寮などを大学が拒否することは「不当な差別的取扱い」になると明記しています。さらに、手話通訳やノート代筆者などの「情報保障手段を用意できない」という理由で、障害のある学生に対して、授業の受講、実習などへの参加を拒否することも「不当な差別的取扱い」に該当するとしています。一方、障害のある学生に対する合理的配慮の具体例としては次のようなものが挙げられています。

- 図書館、コンピューター教室、実験・実習などの施設・整備を他の学生と同様に利用できるよう改善すること
- 移動に困難のある学生が参加している授業で、使用する教室をアクセスしやすい場所に変更すること
- 授業などさまざまな機会において、手話通訳、ノートテイク、パソコンノートテイクなどの情報保障を行うこと

●授業中に教員が使用する資料を事前に提供し、事前に一読したり、読みやすい形式に変換したりする時間を与えること

●口頭の指示だけでは伝わりにくい場合、指示を書面で伝えること

●学外実習において、合理的配慮の提供が可能な機関での実習を認めること

●授業中、ノートを取ることが難しい学生に、板書を写真撮影することを認めること

もちろん、合理的配慮の範囲や内容は、各大学が障害のある学生と話し合いながら個別に決めることになるため、具体例がそのまま実施されるとは限りません。しかし、国大協が合理的配慮の具体例として示したということは、その実施を期待しているということの意味しているともいえます。

私立大学の場合、合理的配慮の提供は努力義務となりますが、具体例として国大協が示した内容は、大学が実施すべきものとして一定の重みを持つことになりそうです。障害のある子どもやその保護者、進路指導関係者などは、大学における合理的配慮の具体例を知っておくべきでしょう。

障害者差別解消法知って 神戸でセミナー



神戸新聞 2015年12月9日

手話も交え、障害者の差別解消などを話し合った討論会＝神戸市長田区若松町4、ピフレホール

障害者差別解消法の来年4月施行を控え、差別をなくし、雇用を促す手立てを考えるセミナー「障害のある人が地域や職場で輝くために」が9日、神戸市長田区であった。同法に対する認知度の低さを少しでも解消しようと、兵庫県と兵庫労働局の主催。企業関係者ら約300人が参加した。

同法は、障害を理由にした不当な差別を公的機関や民間事業者に禁止。必要な配慮

(合理的配慮)を公的機関に義務付け、民間には努力義務とした。施行は目前だが、県による経済・業界団体向け調査では、同法の認知度が極めて低かったという。

セミナーでは、障害者の法定雇用率2%を達成している伊藤ハム(西宮市)の伊藤豊・人事課主事が登壇。「障害者が働く職場が生産部門に集中していた当時は、障害者に対する意識が全社的に広がっていなかった」と話し、2013年以降、事務部門で雇用を始めたことを紹介した。

続く討論会では、岡山理科大学の川島聡准教授が「障害者が周囲に障害を知られたくないために、合理的配慮を求めない問題が想定される」と指摘。海外の例を示し「徹底的にプライバシーを守り、その上で配慮できるよう知恵を絞る必要がある」と話した。(段 貴則)

「しかぼてち」誕生 兵庫・宝塚のシカ肉料理研究者ら開発

産経新聞 2015年12月10日

■「清涼感ある辛みとうまみ」

北海道を除く国内でシカが急増し、農作物が荒らされるなどの食害が問題になる中、世界でも珍しいシカエキスのポテトチップス「しかぼてち」が誕生した。処理される「シカの命」を有効活用しようと、宝塚市のシカ肉料理研究者らが開発。「シカと自然と人間のしあわせな共存」を考える新しいお菓子が、デビューした。

開発したのは、シカ肉料理研究者の林真理さんら。林さんは、「シカのすべてを価値あるものに」を合言葉に、同市中筋山手で「愛deer料理教室」を主宰している。

林さんは、かつて国立民族学博物館（大阪府吹田市）に勤めており、南米などに出かけて、食材への造詣を深めた。平成12年、料理教室を開き、25年10月には食材をシカに絞った現在の料理教室にした。以来、普及促進のため、加工品製造やOEM（相手先ブランドによる製造）受託にも取り組んでいる。

これまで、シカ肉のキーマカレーやシカ肉スモークなどを手掛けた。今回、「みんなが好きなお菓子のかたちにすれば、きつとなじんでもらえ、命の生かし方を考えてもらうきっかけにもなる」とポテトチップスの開発に取り組んだ。食用に捕獲した野生の「丹波鹿」からとったスープをパウダー化。北海道産のジャガイモとヒマラヤ岩塩などを使い「しかぼてち」を作り出した。

パッケージデザインは、24年の「産経はばたけアート公募展」（社会福祉法人「産経新聞厚生文化事業団」主催）の大賞受賞者で、大阪府泉佐野市の障害者支援施設「YELLOW」の利用者、平野喜靖さんがシカを描いた作品3点を選んだ。

試食した人は、「清涼感のある辛み、うまみがある。特有のコクがいい」。林さんは「シカのすべてを価値あるものに、というメッセージを考えていただければ、と思っています」と話している。

パーティーサイズ（120グラム）が税込みで648円。食べきり小サイズ（56グラム）もある。丹波市の「無鹿」や大阪府豊能町の能勢電鉄妙見口駅前の「かめたに」などで販売している。問い合わせは「愛deer料理教室」（電）0797・80・7840。

「笑いネタにしたい」障害女性の居眠り姿投稿 侮辱容疑で17歳女子高生を書類送検

産経新聞 2015年12月10日

列車内で眠っていた障害のある女性（16）の画像をツイッターに投稿したとして、札幌・手稲署は10日、侮辱容疑で札幌市の高校2年の女子生徒（17）を書類送検した。女子生徒は「笑いのネタにしたかった」と容疑を認めているという。

書類送検容疑は、8月1日午後、札幌市内を走行中のJR函館線の普通列車内で寝ていた女性をスマートフォンで無断撮影し「わらいとまんないしぬ」との言葉とともにツイッターに投稿し、侮辱したとしている。

手稲署などによると、女子生徒は女性と面識はなかった。被害者の母親から削除を求められ、投稿から約2時間後に削除したという。

8月1日に女性の伯母が投稿を発見し、同2日に女性の母親が北海道警に相談した。

個人情報満載「手に負えぬ」...支援者名簿回収へ

読売新聞 2015年12月10日

青森県十和田市が、災害時に支援が必要な高齢者や障害者らの個人情報を集めた「避難行動要支援者名簿」を回収する方針を固めたことが9日わかった。

名簿には要支援者の服用薬や健康状態などの情報が記載されており、市から名簿を渡された町内会長らに「情報管理が手に負えない」などの困惑が広がったためという。市は来年1月頃までに名簿を回収・処分したうえで、こうした情報を削除した名簿を作成し、改めて配ることにした。

要支援者名簿は東日本大震災の教訓を踏まえ、災害弱者の避難誘導や迅速な安否確認に生かそうと、2013年6月の災害対策基本法改正で市町村に作成が義務づけられた。市によると、以前は申し出に基づいていたため、市内の対象者は300人程度にとどまっていたが、法改正後は7885人（11月1日現在）に激増したという。市はこのうち、個人情報の提供に同意した要支援者2066人分の名簿を11月下旬、町内会長約230人に郵送した。

だが、名簿には要支援者の持病やかかりつけ医、服用薬、車いす利用などの情報が含まれており、12月に入って各地区の町内会長から「保管の責任を負えない」などの問い合

わせが相次いだという。

市は名簿に載せた情報について「災害時には必要と判断し、要支援者の同意も得ている。だが、町内会長らには事前の説明が足りなかったかもしれない」（沖沢篤・市福祉課長）として名簿の回収を決めた。

内閣府の担当者は市町村がいったん配布した名簿を回収した例について「調べたわけではないが、聞いたことがない」と話している。

地域で頑張る障害者ら紹介 県職員が取材「ニュースレター」



大分合同新聞 2015年12月10日
地域で活躍する障害者ら取材し、「ニュースレター」を作成している県障害福祉課参事の二日市聖子さん＝県庁

県は本年度、地域で活躍する障害者や支援者らを紹介する「ニュースレター」の作成を始めた。県職員が直接取材し、生き生きとした表情を描いている。福祉サービスに取り組む県内の事業所や法人にメールで配信している他、県のホームページにも掲載している。「現場の声、政策に生かす」

取材、編集を担っているのは県障害福祉課参事の二日市聖子さん（52）。県職員は市町村職員と比べて、当事者や家族らの声を直接聞く機会が少ないという。現場の意見を肌で感じ、県の福祉政策に生かそうと取り組み始めた。

8月から毎月1回のペースで、これまでに計4回発行した。各号とも印刷すればA4サイズ、2枚分の内容で、スポーツや仕事に励む障害者、新しくオープンした事業所などを写真を交えて紹介。障害者福祉に関する行事やイベント予告も載せている。

「いろんな分野で頑張る人たちを多くの人に知ってほしい。障害がある人は特別ではなく、地域を構成する身近な存在だと感じてもらえればうれしい」と二日市さん。

現場に足を運ぶことで「人脈は広がっている」と手応えを感じつつ、「一見すると整っている政策も、時代の変化とともに不十分な点が生じている。可能な限り発行を続けて、現場の声を反映した政策を講じたい」と話している。

オカリナで貢献「今後も」 久貝さんにコロニー大賞贈呈 琉球新報 2015年12月10日



照屋義実実行委員から賞状を受け取る久貝友子さん（左）＝9日午前、那覇市のザ・ナハテラス

自立に向けて積極的に活動している障がい者に贈る第20回沖縄コロニー大賞の贈呈式と記念祝賀会（同大賞実行委員会主催）が9日、那覇市のザ・ナハテラスで開かれ、音楽を通じた社会貢献活動で同賞を受賞したオカリナ講師の久貝友子さん（61）＝与那原町＝に賞状と賞金100万円などが贈られた。久貝さんは「この賞に恥じないような活動を今後も続けていきたい」と抱負を語った。

久貝さんは左上肢と両下肢機能に障がいがあり、幼少期から養護学校に通った。講師を務める一方、姉殉子さん（64）と「久音の会」を設立し、福祉施設や学校で慰問活動をしている。

沖縄コロニー大賞は今回で終了し、実行委は時代に即した新たな障がい者らの顕彰を検討している。佐久川清美事務局長は「『障害者のひたすらな姿に光を当てる』というコロニー大賞は役目を終えるが、福祉や障がい者に関わる新たな顕彰を考えたい」と話した。

NHK障害福祉賞の贈呈式



美容師、赤松隆滋さんの『『気持ちいい!』って言うていいんだよ』が選ばれました。

この作品は、美容室に行けずに困っていた発達障害の男の子と出会った赤松さんが、安心できるよう工夫したり歩調を合わせたりして、男の子が美容室で髪を切ることができるようになるまでを丁寧につづっています。

赤松さんは「さまざまな業界のプロがそれぞれの歩幅で進む子どもの様子を温かく見守っていくことが大事だと思う」と話していました。

また、高齢化社会の生き方をテーマにした「NHK銀の零文芸賞」の贈呈式も行われ、最優秀賞は、夫を亡くした女性がある出会いを通じてその死を乗り越えていく様子を描いた、奈良県の鳴原慎一さんの小説「あなた」に贈られました。

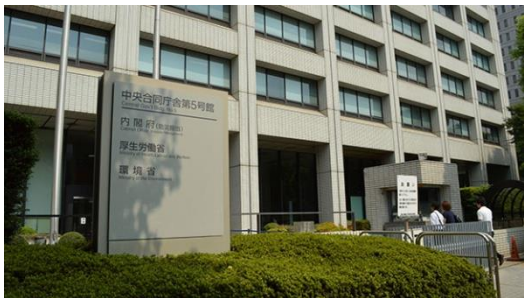
入選作を集めた文集は全国の図書館などに配られるほか、一部はNHK厚生文化事業団のホームページで紹介されます。

NHKニュース 2015年12月9日
障害のある人やその家族などがつづった優れた体験記に贈られる、「NHK障害福祉賞」の贈呈式が東京・渋谷のNHK放送センターで行われました。

「NHK障害福祉賞」は、障害のある人やその家族など周囲の人たちの体験や活動を広く知ってもらおうと、NHK厚生文化事業団とNHKが設けています。

50回目のことは、408の作品の中から11作品が入選し、最優秀賞には京都市の

20歳未満まで養護施設に 児童福祉法の改正へ



福祉新聞 2015年12月09日福祉新聞編集部
厚生労働省

児童福祉法の改正に向けて検討している厚生労働省の「新たな子ども家庭福祉のあり方に関する専門委員会」（委員長＝松原康雄・明治学院大教授）は11月27日、児童養護施設などで暮らせる年齢を来年度から、現在の原則18歳未満から20歳未満に引き上げるよう求める方針を決めた。次回10日の会合でまとめる報告書を踏まえ、厚労省は次期通常国会に改正法案を提出する。

報告書案は、一般家庭の子の8割が大学や専修学校などに進学していることから、虐待などを理由に親と暮らせない子らの措置対象年齢を少なくとも20歳未満に引き上げ、高等学校以降の教育を提供すべきとした。措置延長の年限も22歳未満にするとした。

同法全体の対象年齢引き上げについては、来年度から障害児支援の対象年齢の検討を始めるなど段階を経て、2019年度に結論を出す工程を示した。

報告書案は、児童相談所への虐待通告が増える中、多様な機能を担う現行の体制では対応しきれない危険性があるとして、見直しを提言した。

児相が持っている被虐待児を保護する機能と、子や家庭の支援機能を分け、支援機能を市町村などに移す。児相が保護した後の親との関係を気にして保護を躊躇するのを防ぐ狙いもある。ただ、「役割分担に対応できる専門職員を継続的に置く財政力が市町村にあるか」などと心配する声もある。

児相が持っている被虐待児を保護する機能と、子や家庭の支援機能を分け、支援機能を市町村などに移す。児相が保護した後の親との関係を気にして保護を躊躇するのを防ぐ狙いもある。ただ、「役割分担に対応できる専門職員を継続的に置く財政力が市町村にあるか」などと心配する声もある。

虐待通告を受け付ける機関を創設し、緊急性を判断して警察、児相、市区町村に対応先を振り分ける仕組みの必要性も指摘した。

アスペルガー症候群、障害の特性エッセー風に 函館の母娘が出版

北海道新聞 2015年12月10日

出版した著作を手にする白崎やよいさん(右)と母の花代さん



発達障害の一つ、アスペルガー症候群の白崎やよいさん(31)と、やよいさんの母花代さん(60)＝ともに函館在住＝が同症候群の理解を広げるため、共著「アスペルガーだからこそ私は私―発達障害の娘と定型発達の母の気づきの日々」を生活書院(東京)から出版した。2人は「障害のあるなしにかかわらず、どなたでも参考にしていただける部分がある」と紹介している。

アスペルガー症候群は先天性で、症状の特徴は人によって異なり、相手の感情を考えられなかったり、得意な分野、不得意な分野の差が極端なこともある。やよいさんは大学院を休学中の23歳の時に、アスペルガー症候群と診断された。

著書は2部構成。1部はやよいさん自身が障害の特性について書いた。人の話を聞いても単語通りの意味しか理解できず、含意を十分に把握することができなかったり、しなければならぬ物事の優先順位が付けられないことなどを説明。起こしやすいトラブルや、苦手なことを補うために取り組んだエピソードを紹介している。

2部は花代さんが執筆し、やよいさんの幼少期から高校までの様子や、診断を受けた後の親子のやりとりがどう変わったかなどをつづっている。

やよいさんは診断後まもなく、医師から自己分析を勧められたことがきっかけで、自伝を書き始めた。これが当事者による貴重な資料として医師や当事者家族などに注目され、「出版してみてはどうか」という声が多く寄せられたという。昨年5月から、自伝をエッセー風にわかりやすく書き直し、完成した原稿を花代さんが読んで内容を確認した。

花代さんは確認作業について「娘の文章をあらためて読んで、こんなふうを考えているのかと気付くことも多く、作業は面白かった」と話す。やよいさんも「読んでもらっていた時が1番楽しかった」と振り返る。校正を重ね、今年9月に原稿が完成し、出版にこぎ着けた。

やよいさんは自閉症やアスペルガー症候群の人たちでつくる「自閉症スペクトラム障害成人当事者の会・よせなべ」(函館)の代表を務めており、これからも発達障害についての執筆を続けることにしている。

211ページ。1620円。全国の書店で販売中。(堺麻那)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行